

FACOから見た食の6次産業化プロデューサーに求める視点

それぞれの立ち位置からの食Pro. 段位制度について

食農連携コーディネーター（FACO）+（プラス）

1 食農連携コーディネーター（FACO）の紹介

ヤエガキフード&システム株式会社

専務取締役 佐伯 秀郎 氏

地域活性化コンサルタント

中小企業診断士 石川 聖子 氏

佐伯秀郎氏が所属するヤエガキフード&システム株式会社とは、ヤエガキ酒造株式会社グループの一員として主に農産物加工や食品製造の中小企業向け装置、システムの開発等と健康志向の食品開発、販売などを行っている。

強みは機械導入のみならず、今まで培ってきたノウハウの提供にあると思う。特産品直売所、観光物産館、道の駅、体験工房など、あらゆる農産加工施設での総合的な企画から、設備の施工、製造技術指導までをサポートし、農産加工品に付加価値をつけ、地域活性化の一翼を担っている。

佐伯氏は専務として従事する傍ら、兵庫県の6次産業化プランナーとしても活躍なさっている。また食農連携コーディネーター（FACO）の立ち上げから関わられた経緯をお持ちである。



ヤエガキ
技術開発研究所
ここで商品開発も
行われている。



ヤエガキ
グループ正門

石川聖子氏は食品メーカーを経て経営コンサルティング会社にて実績を重ね、現在は活性化コンサルタントまた中小企業診断士として活躍。

女性の感性を活かした独自の視点で地域ブランドのサポート、地域資源を活用した新事業の立ち上げ支援（奈良県吉野郡大淀町の番茶プロジェクト、奈良県下市町薬膳プロジェクト等）、販売促進支援等を手掛ける。平成26年度地域創業促進支援事業である女性に対しての創業塾も担当されている。



げんき梅プロジェクトでの石川氏

また、いち早く地方創生を掲げ、「東郷湖周 げんきウォーキングプロジェクト」「湯梨浜町らしさのブランディング」を女性の視点でいろんな角度からサポートを行い地域と共に実行された。



創業スクールin大和郡山

2 FACOから見た「食Pro.」について

FACOとして、各々の立ち位置をお持ちのお二人にそれぞれの視点から見た食Pro. についてお話を伺った。

(佐伯氏)

食Pro. という段位制度について結論から言う必要だと感じている。しかしそのスキームに関してはまだまだ議論の余地があるのではないだろうか？

まず中間支援として活動しているサポート側からの視点としての課題である。FACOの設立の際にも、登録することによってどのようなメリットがあるのかという議論がなされた。報酬に反映されるのか？仕事の依頼に結びつくのか？というような内容であった。

今回の食Pro. に関しても同様の事が言えると思う。食Pro. を取得することによってどのようなメリットを感じられるのか？例えば、食Pro. を取得することによって時間単価5,000円は最低報酬として保証されるといった内容である。弁護士の制度などが良い例である。時間単価が明記されている為、相談時間が限られ、相談者も相談内容をまとめてくるようになる。時間の効率化も図れるのではないか。

もしくは他の要素として仕事を受注しやすくなるという内容か。前項同様、これに関しても発注者が食Pro. に任せれば大丈夫という認識をもってもらえないと成立しない。しかし、そのような動きが出てくると自ずと食Pro. 取得に向けて動きが活発になるのではないだろうか。



左側が石川聖子氏、右側が佐伯秀郎氏

もう一つの側面、6次産業化における主役、いわゆる生産者の方々における食Pro. の必要性である。

6次産業化において一番大切なのは当事者、生産者である。しかも「考えられる当事者」ではないだろうか。誰かの言いなりで事業がうまくいくことは無く、自身で考え決定していく必要がある。しかし、一長一短ではなかなか意識付けが難しい。そんな時に食Pro. を受講、も

しくは受験することで掘り起こしができ、意識付けがしやすくなるのではないだろうか？前段も大切であることは否めない。

しかし、一番食Pro. に求めるものは食Pro. としてのネットワークである。一人が持ち得るスキルには限界がある。しかし、そこにプロフェッショナルとしてのネットワークがあれば、それぞれの特性が活かされる。6次産業化とは、生産から商品化等も含めた経営の多角化である。サポートする側も一つの知識では成り立たない。

しかし、そこに食Pro. としての一定の基準をクリアしたプロフェッショナル集団としてのネットワークが構築されていれば容易に問題を解決することが出来る。そのネットワークを上手く活かすようになれば可能性は広がる。

6次産業化において大切なのは出口（販路）である。しかし一番困っているのはまさしく販路なのだ。そこで力を発揮できるプランナーが必要だと考える。そんな時にネットワークは絶大な力を発揮できるのではないかと？

(石川氏)

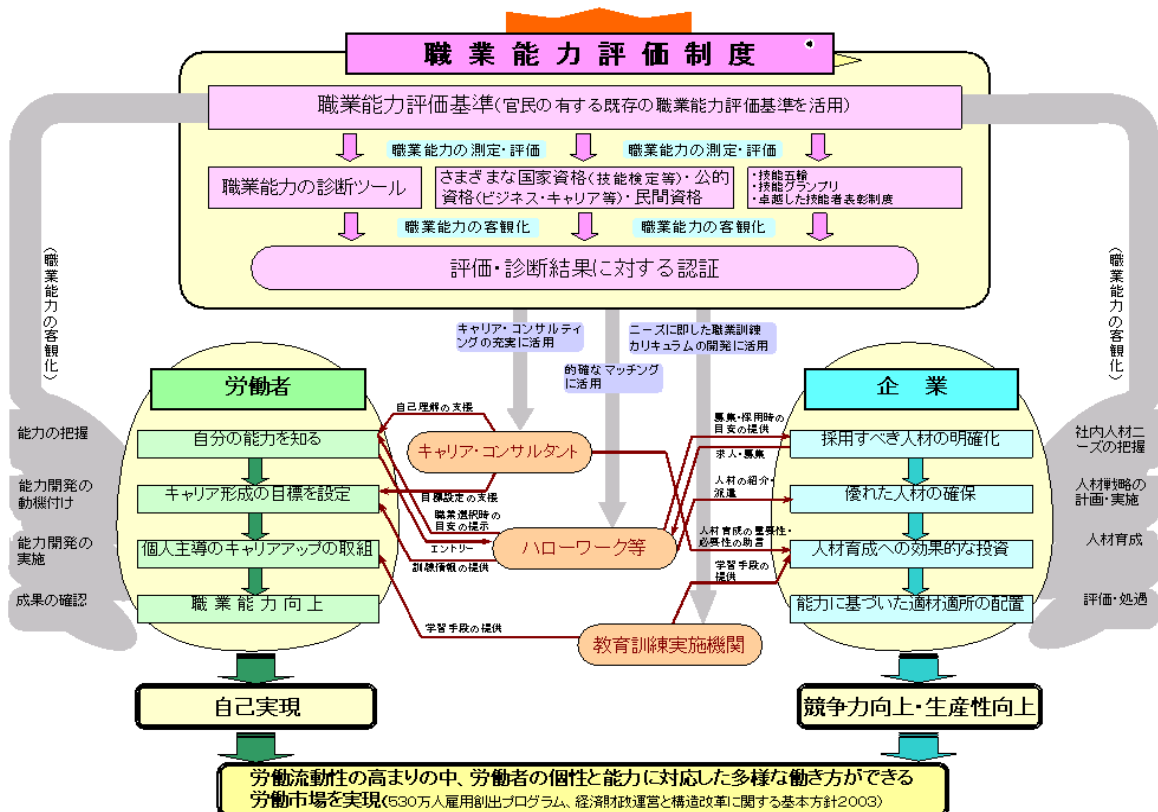
まだきちんと把握できていないので、この資格が必要かどうかはこれから考えていきたいと思います。資格制度自体が是か否かというより、ブラッシュアップして肯定的な（＝つまり必要とされるもの）資格としていくことが必要だと考えます。

そもそも論として、食Pro. を知っている人が何人いるのでしょうか？私自身も食Pro. という名前は知っていても理解をしているレベルではありません。必要としている情報だから取りにいこうとしますが、そう考えなければ知らないままで終わります。だから聞いたことがある程度になるのではないのでしょうか。

今回の食Pro. という段位制度を伺って、私が以前関わっていたビジネスキャリア制度を思い出しました。

厚生労働省としてはキャリアアップの一環として、キャリアの認識のツールとして行っていたものでした。しかし、実際に資格を取得しても、企業側に認識が無ければそれは評価の対象にはならないという現状がありました。自己啓発という観点からの取得であれば、レベルが上がることによってモチベーションアップになるでしょう。自己完結であるので、「受かった！」「良かった！」「明日から頑張れる！」で良いのだと思います。しかし転職の際の強み、武器になるとして取得したのなら、相手側が認識していなければそれは全く通用しないことになるのです。

食農連携コーディネーター（FACO）



ビジネスキャリア制度とは (wikipediaより)

平成5年に、当時の労働省（現：厚生労働省）が発足。この制度は、事務系職業の労働者に求められる能力の高度化に対処するために、段階的・計画的に自らの職業能力の習得を支援し、キャリアアップのための職業能力の客観的な証明を行うことを目的としている。

食Pro.にも同様の事が言えると思います。だからこそ食Pro.の知名度を上げていく必要があるのではないのでしょうか？食Pro.を取得して報酬に繋げよう考えている人がいるのであれば価値を相方向で認識していなければ成り立たないと思います。

また当事者（生産者）が受講するメリットについてですが、受講することによって事業を進めるために熟考や準備すべきことに気づいたり、時には資金面などで事業を進めることが困難であることに気づく機会になると思います。前に進まない勇気も必要なのですが、そのことに気づける機会がなかなか無いのです。その為にも必要な場になると思います。

自立性とネットワーク

(石川氏)

ネットワークは必要不可欠だと思います。ネットワークの一員としての要件で自立性は外せないと思います。

佐伯さんがおっしゃった内容のネットワーク構築を目指すのであれば、能力集団いわゆるプロフェッショナルであることと同時に自立している個である必要があります。誰かに頼ってばかりでは頼ろうと思っても頼れません。また自立していない人は向上心が希薄であるように思います。それぞれが常にプロフェッショナルとしての意識を持ち続けることが絶対条件だと感じています。

(佐伯氏)

ネットワークの必要性は実際に体感している。自身が酒造という分野に携わり、何か困りごとがあれば大学のネットワーク、特に醸造学科に関わった人達に紹介してもらっている。面識のない人にお目にかかりたいと思った時に、知り合いに紹介してもらおうと話が通じやすい。先方も紹介者がいるので、聞く体制（受け入れ体制）で待っていてくれるのである。またなにかの話題で議論になったとしても共通認識があるので、議論がしやすいという利点も生まれる。

3 最後に

私自身も食Pro. レベル4の認定を取得しているが、今回FACOとして活躍されているお二人のお話が聞けたのはとても有意義であった。

食Pro. に求められているもの、それは食Pro. に任せれば大丈夫という信頼、そしてその信頼を基盤に広がっていく知名度。そのためにはプロフェッショナル集団としてのネットワークを構築する必要があるということ。お二人からのお話によって、今後の自身の立ち位置、これ

からのビジョンなど考えさせられる時間が持てたことはとても嬉しいことだった。

これからも今まで以上に研鑽を深め、皆様の目標にしていだけるようなそんな食Pro. でありたいと思う。

◇ ◇ ◇

平成27年3月

執筆：亀山 初美

(食の6次産業化プロデューサー レベル4)

市場性の向上(知名度の認知)

